

最優秀賞

— 大学・一般の部 —

「言葉のたび」

南千尋さん

推し本:『わたしの芭蕉』

著:加賀乙彦

推したい相手:忙しく働く大人へ



審査員コメント



QuizKnock
須貝駿貴

芭蕉にとっての光堂のように、南さんにとって無駄を削ぎ落とした日本語はただの日常以上に光り輝いて見える、そんな思いが伝わりました。実はこの作品は字数が他の方の作品より少ないです。まるで俳句のように、伝えたいことに絞って書いてくださったのでしょうか。

「言葉のたび」 南千尋

「五月雨の降残してや光堂」言わずと知れた松尾芭蕉の名句である。私がこの句と向き合ったのは、大学四年生、母校での教育実習の時だった。当時、私は生徒へこの句の解釈をこのように伝えた。「光堂のあまりの美しさに、まるで雨が避けて降っているみたいだったんだね」と。今、この本の中でこの句と再会し、当時の自身の解釈の浅さに愕然とした。雨が光堂に降らないわけがない。至極当然である。「雨が避けて降っている」のではなく、雨に降られ、腐敗する運命にありながら、腐りもせず、古びもせず、凜としてそこにある光堂の姿に芭蕉は胸打たれ、それを十七文字に託したのだ。この解釈自体はそれほど難しくもなく、なぜ、当時の自身が思い至らなかったのかと思うと恥ずかしく、生徒たちには申し訳ない気持ちである。しかし、この本の素晴らしい点はその解釈に気づかせてくれただけではない。まるで芭蕉の心の動きを目で追っているかのように、その感動や心の揺れまでもが表現されている。加賀先生の中にいる芭蕉が私の前で推敲を重ねたり、森羅万象に心を動かされたりしている。普段の生活でも、人と感動を共有できると嬉しいが、悠久の時を超えてもなお、それが体験できることは筆舌に尽くし難いほどの喜びである。この本はその体験を与えてくれる。言葉は心よりも貧しい。私は常々こう考えてきた。私の想いもこうして文章にしてしまえば、そこにあった余情が切り取られてしまう。「霧しぐれ富士をみぬ日ぞ面白き」この句に対して加賀先生はこのように説明する。「記憶の富士がかえって以前の美しい姿を霧の幕を透して想像させ、その最良

の姿を見せてくれる。しかも、霧の流れも独特の形で、記憶の富士を美しく装飾しているではないか。これこそ本当の富士の面白さだと主張した句である。写実を旨とした作風に反して想像美を楽しむ独特の境地がうかがえる。」

このあとに続く、霧に包まれた富士山の描写を見た時の私の感動たるや！腹の底から何か得体の知れない圧が湧き起こり、胸一杯に広がって、目を瞑ると霧に隠れた富士山が見えてくる。深く息を吸い込めば、清々しく冷ややかな空気が入ってくる（気がする）。文字として書いてしまえば、こんなものか、と思いたくなるが、本来はもっと内から湧き出る何かがあった。しかし、私は「筆舌に尽くし難いほどの喜び」と余情を切り捨てるよりこの感動を表現する術を持たない。だが、そう考える時、だからこそ古人たちは、文字数を限定したのではないかと思いついた。どれだけ言葉を尽くしても、胸に湛えた想いなど伝えることはできないからこそ、三十一文字の和歌に、十七文字の俳句に心をのせてきたのだろう。その営みを美しいと思う。その美しさを眼前に見せつけてくれるのが、この本である。

私は今、この本を忙しなく働く大人へのご褒美として推したい。たまの休日、毛布にくるまりながら、ソファや座椅子に座り、温かいお茶を飲み、陽の光を茶請け代わりに言葉の世界を堪能する。至福の時間である。現実には飛び交う、カタカナ語や略し言葉も好きだが、たった一文字で意味や印象が変化する日本語の複雑さも悪くない。止まらない時間の合間に、その複雑さを楽しむ心の余裕が日々闘いに身を置く大人に必要なのではないかと考える。仕事でこの文章を読むあなたにも。ただし、この本を読む時には時間がかかる。一文字一文字を噛みしめながら読めば、もっと時間がかかる。そんな時間も楽しみつつ、少しずつ、宛ら『奥の細道』の中の芭蕉のように、折に触れて心を動かしながら、のんびり読んで欲しい。私も今から、ホットコーヒーを片手に「冬」の旅しに行こうと思う。